OCUAC

大阪市立大学山岳会会報　NO.40　2005. 8

八峰キレット小屋が指呼の間に見える。この山域には２回生の３月山で烏帽子～白馬まで縦走した折の経験しかないが、その折 3 日間吹雪に閉じ込められ、乏しい食料を食い繋いだ事が想い出される。数えでも齢まだ６３歳なのでﾁｮｯﾄ大げさだが、次の歌が口を衝く。

『歳たけて、また合い見んと思いきや、　命なりけり切れっ戸の小屋』

あの春山は烏帽子から船窪・蓮華を通過する辺りで豪雪に見舞われ日程が遅れ、辿り着いたｷﾚｯﾄ小屋では食料不足でと、相当な消耗を強いられた。今快晴とはいえ雪の天狗尾根から４０年ぶりに間近にあの小屋を見たものだから、ついまね歌を作ってみた。西行さんにもお許しいただけるものと思う。

ここから延々500mの高度を登って行くが、途中小屋岩で２ピッチのザイル・ワークがあり、息がつける。更に登れば東尾根との合流点に達し、そのまま北峰へ詰め上がってゆく。北峰頂上直前の 20m程は両側の切れた１m幅の雪稜で、緩傾斜だが気分の出る所だった。

そして剣の連峰が目に飛び込んでくる。（13 時 10 分）

（鹿島槍天狗尾根登攀より）

小屋岩の左を回り込むこのあと２ピッチのザイルワークが待っていた

白い秀峰と温泉の旅

「四川省・最高峰ミニアコンガ展望～ハイローゴー氷河とゆったり温泉の旅６日間」

奥田　寛

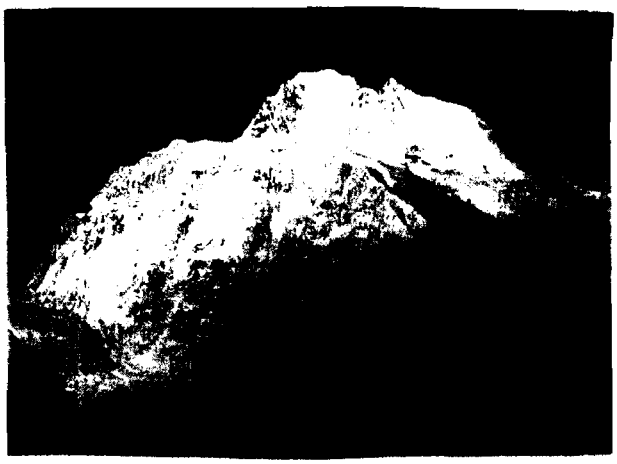
ミニヤコンガ（７５５６m）は、ご存知の方も多いと思いますが、１９８２年の春、遭難した松田宏也氏（市川山岳会）が奇跡の生還をした山です。

昨年１２月中旬の夜、突然、広谷先輩から自宅へ電話があり、「3月のツアーに行くので、松田氏と同じ会社の君はぜひ行くべきだ」というような勧誘をうけました。「3月？！」と思ったものの、ついその気になって参加することになった次第です。

今回入るハイローゴー氷河（全長１４．７km、面積１６平方キロ。アジアで最も規模が大きく、標高が低い）は、市川山岳会がはじめて登山使用したルートでしたが、今は森林公園として宿泊施設も整い、ロープウエイ利用でミニヤコンガを労せずして真正面に眺められる有り様です。更に温泉付きとは、なんともお気楽な旅先になったものだ、と感心したものです。

<注>ミニヤコンガ登山小史

１９３２年１０月	米国隊、北西稜から初登頂
１９５７年　６月	中国隊、北西稜から第２登
１９８１年　５月	北海道岳連隊、ヤンズーゴー氷河より北東稜経由で頂上を目指すが事故のため登山中止。
１９８２年　４月	市川山岳会隊、ハイローゴー氷河より北東稜経由で頂上を目指すが頂上直下でアタック隊が消息を絶つ。アタック隊２名は独力で下降したが５月１９日、松田隊員のみ現地人に救出される（奇跡の生還）。
１９９０年　５月	北海道岳連隊、北西稜から頂上を目指すも６５００mで敗退。
１９９１年　９月	日本ヒマラヤ協会隊、ハイローゴー氷河より北東稜を



2

目指すが６４００ｍで敗退。
１９９４年１０月　日本ヒマラヤ協会隊、北東稜から頂上を目指すが４名消息を絶つ。
１９９７年　５月　札幌山岳会隊、ヤンズーゴー氷河より北西稜経由で日本人初登頂。

＜旅の概要＞
主　催：ヒマラヤ観光開発（株）
期　間：０５年３月１５日（火）～２０日（日）
参加者：広谷先輩、橋本先輩、北濃先輩、奥田（以上　OCUAC）
石過氏（広谷先輩の理学部後輩）、
高木氏（一般参加）
［奥田：５０代後半、他の方々：６０代後半～７０代前半］

3月１５日（火）
成田空港　８：５５　→北京　経由）
→１５：３５　成都空港
定員（１０人）割れのため、日本からの添乗員はつかないが、幸いなことに北濃先輩が参加されておられるので、何の不安もない。乗り込んだ中国国際航空は座席が狭いが、飛行時間は長くないので助かる。機内の飲み物でビールを注文したところ、冷やし過ぎで凍っていた（北京から成都への便も同じ）。それはともかく、北京での待ち時間も短く順調に成都へ向かった。成都空港に近づくにつれ、下界は見渡す限り見事な黄色い畑が広がる。菜の花畑であった。
成都空港で現地ガイドの Pan 氏の出迎えを受け、専用車で一路「花園城大飯店」へ。車中でPan氏より「必ずしもミニヤコンガが見えるとは限らず、天気次第」、とダメを出されてしまった。夕食はホテル近くのレストランで。四川料理は案外辛すぎず、口に馴染んだ。
3月１６日（水）
花園城大飯店８：３０→　１６：３０二郎山トンネル　→　第三号営地（２９４０m）
今日は、ハイローゴー森林公園・第三号営地まで、南西３００ｋｍの距離を川蔵公路を通って、車で一気に走り切る過酷な１日となった。当初は高速道路を快調に走っているかに思えた専用車が急に不調となり、何とか高速道路を降りきって、雅安市郊外の整備工場に立ち寄る。結局、この車での続行を断念することになり、雅安市で昼食を摂りながら代用車が成都から来るのを待つことになった。
１４：３０　ようやく代用車で出発となる。今回の車は韓国・現代の車で２年前購入とかで、快調に飛ばす。雅安市に続く天全は木工品が特産で、木の彫刻が道路際に並び、見事であった。遅れもあって車は先行車をどんどん追い越してビュンビュン飛ばす。
大工事の末に開通した二郎山トンネルをようやく抜け、チベットに行く道と分かれて、大渡河（長江の支流）に沿った道を磨西へ。磨西からは森林公園の車（到着が遅れて、乗合シャトルバスは運行せず）に乗り換える。この車も日暮れないうちに、と九十九折りの坂道をものともせずビュンビュン飛ばす。何とか日が沈まないうちに本日のホテル「銀山大飯店」に到着できた（感じとしては、上高地の西糸屋か）。さすがに、寒い。

3月１７日（木）
９：００～１２：００　城門洞氷川（氷河の末端）へハイキング
１２：３０～１３：１５　昼食
１３：４５～１６：００「旧展望台」へハイキング（有志のみ）

天候が良くないので、日程変更して氷河末端へのハイキングとなる。途上に、「松田宏也小道」なる掲示板があり、来た証しにと記念撮影する。今回の参加者は氷河を知っているし、ガスっていることもあって、氷河末端から早々に引き上げて帰途についた。
午後は、Pan 氏の案内で有志が「旧展望台」へ。結局、最後までついて行ったのは高木氏

と私のみ。「旧展望台」には小屋があり、若夫婦が住んでいた。小屋には薬草等の漢方薬の材料が置いてあった。帰途、内モンゴルから来た犬連れの若夫婦に出会った。約6カ月、各地をトレッキングしているとか。夕食は、すぐ下にある「金山飯店」で摂る。あいにくの小雨となり、明日のミニヤコンガ展望ができるのかどうか、非常に気遣う。

3月18日（金）

９：００出発　→（乗合シャトルバス）→（ロープウエイ）→　氷河展望台着
氷河展望台１１：１０→　第三号営地（昼食１２：１５～１３：００）１３：００　→　１３：３０　第二号営地

昨夜の雨が雪となり、周囲が雪景色に一変していた。６時３０分のモーニング・コールののち外に出たところ、ガスが見る見るうちに上がり、白く輝くミニヤコンガの衛星峰（金銀山、三連峰）が眼前に現れてきた。待望の晴天となり、期待に胸がふくらむ。

９時に乗合シャトルバスに乗り込んだところ、昨夜「金山飯店」で隣のテーブルにて食事をしていた若い女性中心のグループが乗っていた（広東から来た職場旅行組とのこと。北濃先輩の入手情報）。ロープウエイで氷河を渡り、氷河展望台へ（約３６５０ｍ）。

氷河展望台からは、主峰ミニヤコンガの雄姿を正面にして、３６０度の大パノラマが広がって申し分なし。少しは雲がかからないと絵にならない、等贅沢な声があがるほどである。

十分に眺望を堪能して帰途につく。今日の昼食は殊のほかゆったりとしたものになった。ゆっくりし過ぎてバスを待たせた形になり、慌ててレストランを出てバスに乗り込む。
本日は温泉の湧く第二号営地で泊まるだけ。例の広東の職場旅行組も同じ予定であった。ここ「氷川温泉」は中国１０大温泉の１つで、源泉は９２度に達しているとのこと。

宿泊所の対岸に温度の違った湯船がある。吊り橋を渡り、日本の銭湯のように「番台」で着替えのロッカー・キーをもらう。水着に穿き替えて、違った温度の湯を楽しんだ。

これで今回の旅２つの目的達成となった。満足。

3月19日（土）

第二号営地　８：００→８：４０
磨石９：００　→１０：００　二郎山トンネル出口→１１：２５　天全（昼食）
１２：１５　→
１４：５５成都「花園城大飯店」

乗合シャトルバスに乗り、磨石へ。ここで出迎えの専用車に乗り替え、一路成都へ向かう。二郎山トンネルに入る手前で振り返ると、ミニヤコンガの白銀の山容を望むことができた。

トンネルを抜けると、天候が一変し、霧雨が降っていた。下るにつれて、さすがに小雨は断続的となり、止んだりもしたが、成都までどんよりとした天気が続いた。

成都最後の夕食は、１５日の時点で広谷先輩ご推奨の薬膳料理店（＝「欽善斉」）に変更されていたが、確かに酒も料理も期待にたがわず美味であった（当初は麻婆豆腐料理店）。

3月20日（日）

花園城大飯店　１１：３０　→　成都空港
１３：４０　→　２１：００　成田空港着
１１時まで各自自由行動（市内散策、名所旧跡の訪問、買い物、囲碁）。多少のトラブルはあったものの、往路と同じ北京経由で全員無事予定通り帰国できた。お疲れ様でした。

鹿島槍岳天狗尾根

２００５年5月３日～５日

佐々木、兵頭、吉村、山田

冬の鹿島槍を天狗尾根から登ろうと駒ヶ根山荘に集まったのはもう６～７年も前で、まだ苑樹さんご健在の時だった。その折は、種々の事情で対象が西穂の西尾根に変わり、以降はそんな元気なことを言い出す者もなく時が経過していった。

５月山はここ２年間現役の新人合宿に付き合ってきているので、今年もと予定していたが、残念ながら新人が現れず、２、３回生の山行に加えてもらうのは遠慮してＯＢだけの山行を考えた。何処にするかは、西穂の時の兵頭君参加なら天狗尾根に異論が出るはずもなく、京都の吉村さんも来ると言うので、佐々木さんを加え去年の岳沢「こぶ尾根」のﾒﾝﾊﾞｰが復活した形となった。男３名の平均年齢は６０歳を超えており、去年とどちらがｷﾂｶｯﾀか？面白かったか？以下の拙文にお目通し下さい。

５月３日　晴れ

駒ヶ根山荘４時２０分発。岡谷辺りで北アルプスの雪稜がﾁﾗﾁﾗ見え出す。こちらからは常念の山頂の東側への広がりが突起に見えて、なかなか魅力的だ。豊科から大町への安曇野は出来たばかりの水田が広がり、銀白の後立山連峰と若葉とは何時ものように目を楽しませてくれる。途中スキー場方向へ道を間違え少し遅れて大谷原に着く。７時出発。アラ沢出合までに２箇所渡渉。先行は２ﾊﾟｰﾃｨｰ５名。大谷原にはかなり集まっていたが、天狗尾根にはこの程度しか向かわず、先行者は足が速いので山は静寂に包まれていた。

天狗尾根取り付き９時半。　踏み跡も疎らな急斜面を小枝や木の根を掴みよじ登ってゆく。落ち葉で足が滑り、甚だしくｴﾈﾙｷﾞｰを消化する。小窓尾根や北鎌尾根の取り付きを思わせる。尾根上 11 時。この直前辺りから積雪面となる。尾根を暫くたどりクーロワールに取り付く。

午後の軟化した雪の急斜面を攀じ登るのはﾁｮｯﾄしたコツが必要。右手のピッケルはシャフトの元まで埋まる状態で、足場を崩すことなく次の一歩を踏み出すには左手を上の踏み跡に旨く突っ込んで微妙なバランスを保たねばならない。斜度はきついがザイルを出すには抵抗があり、先頭の佐々木さん、ﾄﾞﾝﾄﾞﾝ上ってゆくものだからこちらも遅れじとついてゆく間に後続との距離が開きすぎた。第二クーロワールの出口付近までこんな調子だったが、さすがに最後のところは雪のステップが崩れればそのまま下まで行ってしまうので、通過したあと、ルート工作を施す。あれやこれやの内に時間が経過し、第二クーロワールを抜けて平らになった山稜の 2100 m地点に幕営する。（１６時）

5

５月４日　晴れ

出発６時２０分。テント地からは天狗の鼻への急斜面が構えているが、取り付きまでにやせ尾根を暫く上り下りする。登り斜面１個所でザイルを出す。天狗の鼻着７時50分。ここからは遠見尾根、後立主稜、鹿島北南峰、鹿島東尾根更に爺や蓮華方面が見事に展望できる。今日も快晴だ。

八峰キレット小屋が指呼の間に見える。この山域には２回生の３月山で烏帽子～白馬まで縦走した折の経験しかないが、その折３日間吹雪に閉じ込められ、乏しい食料を食い繋いだ事が想い出される。数えでも齢まだ６３歳なのでﾁｮｯﾄ大げさだが、次の歌が口を衝く。

『歳たけて、また合い見んと思いきや、　命なりけり切れっ戸の小屋』

あの春山は烏帽子から船窪・蓮華を通過する辺りで豪雪に見舞われ日程が遅れ、辿り着いたｷﾚｯﾄ小屋では食料不足でと、相当な消耗を強いられた。今快晴とはいえ雪の天狗尾根から４０年ぶりに間近にあの小屋を見たものだから、ついまね歌を作ってみた。西行さんにもお許しいただけるものと思う。

ここから延々500mの高度を登って行くが、途中小屋岩で２ピッチのザイル・ワークがあり、息がつける。更に登れば東尾根との合流点に達し、そのまま北峰へ詰め上がってゆく。北峰頂上直前の 20m程は両側の切れた１m幅の雪稜で、緩傾斜だが気分の出る所だった。
そして剣の連峰が目に飛び込んでくる。（13時10分）

北峰から南峰へ、更に強風の中を冷池まで、核心部を越えてからのアルバイトに大汗をかいた。吉村さんここまでよく頑張った。（16時）

５月５日　晴れ

冷池発　６時30分。赤岩尾根の上部は雪が固く少々緊張するも、途中から西沢へ出て山田はもっぱらｼﾘｾｰﾄﾞを交え駆け下る。大谷原着 9 時10分。

以上のように、連日快晴に恵まれ余裕を持って終えることが出来た。こぶ尾根との比較は、あちらはアタック形式で、それも困難なルートを選んだ上での日帰りの遊びだったので
単純比較は出来ないけれど、ルートの難易度はこぶの方が上。但し天狗尾根は、降雪期には
ルート工作に相当の時間を要すること確かで、5 月だからテントを上にあげられたと思っている。対面に見えた東尾根の上部はかなり急峻な岩稜で、次はあちらにとの思いを抱いて下山した。

以上

6

木曽駒山行報告

（２００５・３．３１～４．４）

現役　小椋　剛、塩見修平

３月３１日（木）　晴れ

あさ６：００に市大集合。門からは入れないので、フェンスを乗り越えて部室に侵入、荷物を持ち出す。今回の参加者は、塩見・藤井（元、市大野鳥の会会長）・小椋。

塩見さんが車を出してくれた上、駒ヶ根まで延々１０時間、ぶっとうしで運転してくれた。高速を使わずずっと下道を通ったおかげで、青空の下、楽しいドライブ（軽なので座っているのが少ししんどかったけど）ができた。駒ヶ根に着く直前、車の走行距離メーターが１１万１１１１ｋｍになったので道路わきの駐車場でちょいと記念写真。で、駒ヶ根のベルマールで今日の夕食と明日の朝食を買出して雪線へ。夕食は各自適当に買っためいめい食べるという味気ないものに…実は僕がペミカンを作るのを忘れるという大ヘマをしたので、塩見さんが今日の夕食用に持ってきたペミカンとチャンコ鍋の素を急遽山へ持っていくことに（これが後で少しばかりトラブルに…）なったからなんですが。

夕食後、少しミーティングしてから、明日は３:００起きということで２０:００には就寝。ここのとこ少々睡眠不足＋今日のドライブで疲れていたにもかかわらず中々寝られずいらいらしながら一晩すごした。

４月１日（金）　晴れ

３：００（起床）～４：１５（雪線出発）～５：１５（登山口出発）～８：５０（長尾根取り付き）～１０：１０（長尾根小屋）～１５：００（稜線）～１６：３０（西駒山荘）

エープリルフールだがだいした嘘は出なかった。

約束通り３：００に起床して、朝飯は早々に済まし、４：００に出発。伊那谷のささやかな夜景が美しい。そして「南の風風力３」が煌煌しい。今日の晴天は約束されたようなもので月と星がよく見えた。

５：００ごろ小黒川キャンプ場前で車止めゲートに出くわしたのでここから歩く。五時半ごろにはだいぶ明るくなってきた。

今回は長尾根ルートをとるので、桂小場登山口は通り過ぎてさらに林道をつめ、林道終点からは小黒川をつめる。積雪は５０ｃｍほどあったが、つぼ足で行けて、テープもしっかりついていたため迷うこともなかったが、雪崩の跡があったのが少し怖かったのと、一箇所橋が流されていて渡渉に難儀した。と、ここでトラブルが…休憩が終わり、いざ塩見さんがザックを持ち上げるとその付近の雪がどうも黄色っぽい。まさかとザックをあけると、何とチャンコの素が全部溢れ出していた。元々の原因が僕なのに、ツボにはまって一人で大爆笑してしまった…どうもすんません。

長尾根取り付きまでは大して苦もなく行けたが、ここの尾根の取り付きはかなり急で少々怖かった。難所を越えて見上げる稜線ははるか高く、尾根もかなり急峻なので先が思いやられる。最近忙しくて山も行ってないし、走ってもいないという塩見さんはこの辺りから少しペースが落ちはじめた。

とても温かい、したがって足はよく潜る。稜線に出るまでずっと樹林帯。ラッセルありしんどい。テープはしっかり付いているものの、木

があっても滑落の怖さを感じるほど箇所がでてくるほど急なので、僕もやがてばて始めた。結局尾根の最後の方はずっと藤井さんがラッセルしてくれた。尾根の途中伊那谷・南ア・八ツなんかが見えるたび歓声を上げていたが、実は一刻も早く寝袋に入ることを考えていた僕でした…塩見さんと僕だけだったらきっと力尽き尾根途中でキャンプ。とにかくこの尾根での藤井さんの活躍は素晴しかった。

１５：００ごろ、６時間ほどかけてやっと稜線に出る。ここからは塩見さんがハッスルして、西駒山荘まで頑張った、しかし僕はやはりだらだらと踏み後をたどるのが精一杯。体力よりもむしろ気持ちの点で萎えてしまった。やる気がどうも出てこない。

山荘の中にテントを張らしてもらい、コンロなんか炊くとめちゃめちゃ温かい。正に幸せ…ただチャンコ鍋の素は朝のうちに流れてしまったので、代わりに、マルタイ棒ラーメンのスープで味付け。ペミカンそのものがよかったので割り方おいしかった。

疲れているはずなのに全然寝れず寝袋の中でずっと起きていた。

４月２日（土）　晴れ

５：４０（発）～７：２５（木曽駒が岳）～９：００（将棋頭山）～９：１０（西駒山荘）

３：３０過ぎ起床。何となくだるくて登頂意欲が湧かない。しかも朝食のラーメンが悲劇的にまずかったので、テンションは↓。それでも素晴しい快晴に恵まれ５：４０には出発。今日の行動は、西駒山荘から木曽駒ケ岳往復だけで距離も短く、難所も馬の背のごく一部ということだったが、僕は始めから足取りが重くのっけから２人に離されてしまった。

風は強かったけど、馬の背もそれほど大した事なく、難なく山頂へ。僕の消沈に比べて、藤井さんは生き生きとしていた。南方の宝剣など山頂からの景色にもいたく感動していた模様。帰りは往路を戻り、将棋頭山にも足を伸ばした。

小屋に着いたのは９：００過ぎ。塩見さんはずっと睡眠、僕は２時間ほどまどろんでから読書、そして藤井さんはというと、何と数学の教科書を、きちんと小屋のテーブルに腰掛けながら延々７時間近く眺めていたらしい。ただ、頭にはちっとも入らなかったそうな。それから１６時の天気図を取って、晩御飯。キムチ鍋のできは素晴しかった。後は明日の天気さえよければすべてよし、てなわけで大半を小屋で過ごした一日が終わった。

夜また寝れなくて、２３時ごろトイレ行った折、雪が入り口に積もって出口の開閉が大変だったと大騒ぎしたため、眠りかけた二人を起こしてしまい、大ひんしゅくを買った。

４月３日（日）　曇り

５：４５（発）～７：００（６合目）～大樽小屋（７：４０）～登山口（１０：００）

天候が崩れてきそうだったので心配していたが、外を見ると薄日が射して青空も見えていた。

稜線は早々と終わり、樹林帯に入る手前で塩見さんの提案によってワカンを付ける。ワカンの紐の締め方が甘くて、歩き始めてすぐにはずれてきてしまい、塩見さんに「締め方が甘い。」と怒られてしまった。下るだけなので非常に楽。だんだん高度が下がるにつれて温かくなってきて雪がべたべたしてきたものの、天候も崩れず、

8

難なく桂小場に到着。やっぱ春はええわ～と、ぬくい陽気に満足しながら、車窓から見える山に感慨にふける。

雪線に１０時３０分あたりには戻ってしまったので、朝風呂でもするかと、駒の湯まで出かけゆっくりとお風呂を楽しむ。風呂の後は各自ベルマールで買い込んだ昼食を食ってからは自由行動。塩見さんはお昼寝。藤井さんは光善寺に散歩。僕は読書。と、ここで久保田さんが雪線にやってきたのだが、僕たちが雪線を無断で使っていたので、今度からはきちっと連絡してから使うようにと２言３言注意をして帰っていった（今度からは必ず連絡します）。

１７時くらいから、美味いと評判の店にソースカツ丼を食いに行く。１０００円もしたが、それに見合うおいしさだった。雪線に戻ってから２１時くらいまでずっとお話。結構深刻な話ができて面白かった。今の山岳部は…今の山で失われてしまったものは…今までの人生は…自分という人間は…云々。

安心していたので、そこそこ寝れた。

４月４日（月）　雪→晴れ

目が覚めて外を見ると、何と雪！今日も下道なので早く出る。

南下して、標高が下がるにつれ雨に変わる。清内路峠を越えたころから回復してきて、中津川あたりで薄日。名古屋に入るころにはすっかり上天気。いつみてもなつかしい生駒山にただいまを言って、大阪へ。１６時ごろ着。入学手続きの日で人がごったがえしている市大に戻ると、感慨も糞もなくなった。

個人的感想

今回は、大変！やる気が落ちていました。自分の感情があちこちと動き回ってとりとめがなく、歩いていると非常に不愉快になってくるのです。近いうちに、ぜひ山に（絶対に一人というのが絶対条件）しばらくこもっていたい気持ちになっています。単独行で、しかも移動ではなく、滞在型で！！アルピニズムではなく、今年は、個人的には、山の別の側面を求めていこうと思います。部の考え方のまとまりも無い事ですので（部員の意欲がバラバラ）、みんな集まっての恒例の行事以外は、個人の趣味を深めようと決心しました。これは、宣言。今年の山登りは、山遊びとして、全く一般的な娯楽として、去年のナンセンスな重苦しさは吹き飛ばして楽しく自分の欲求でぶつかって行きたいと思っております。

ともあれ、来てくれた２人にはまず感謝！長尾根は一人ではまず間違いなく登れませんでした。そして、藤井さんの現在の熱意の高さには驚かされましたし、感心しました。

僕は、意欲の問題ですね。何か得られなきゃ行きたくもないし、トレーニングもしたくない。得られるものより、浪費しているものが多いという感がすると、どうしてもやる気が出てこない。今年の感想は…得られるものより…浪費したものが多かった！！どう計算しても。まさに、こ・れ！浪費は浪費で、あって悪い事ではないと思いますが、いつまでも続くと堪りませんからね。

そんなわけで、今年は、実験の年ということで。学校の方がやや忙しくなって、山へ行く時間は結構減ると思いますが、ひたすら自分の感情に任せて行く。これです。せっかくの大事な大学時代ですからね。手にしているものを大事に使わないほど愚かな事は無い、と思いました。

２００５年ニュージーランドの山旅

藤本　勇

２０００年１月から２月にかけて１ヶ月の間、ニュージーランドを訪れたのが始めてであった。それ以来毎年のように訪問している。今回で５度目のニュージーランドである。最近は２ヶ月から３ヶ月の滞在がほとんどである。広い清潔なキッチン、たくさんの鍋、調理器具、食器類が備わっている YHA(ユース・ホステル)は我々自炊組にとっては、まことに有難い宿である。おまけに安い。醤油、かつおなどがあれば近くのスーパーで食材やビール、ワインを求めノンオイルのあきのこない食生活を続けられる。

ニュージランド政府の DOC(Department of Conservion、さしずめ日本の環境省)が推奨しているトラックはグレートワォークと名づけてニュージランド全土で９つほどある。有名なのは「世界で一番美しい散歩道」と云われているミルフォード・トラック。山岳コースとしても人気のあるルートバン・トラック。老若男女で賑やかなエーベル・タスマン・トラックなど。これらのトラックを寝袋と食料を担いで歩いたので、今年は新しく人気のない静かなトラックを歩いてみたかった。

ラキウラ（Rakiura）

ニュージーランドの南島の最南端に佐渡島の２倍ほどの島がある。人口４００人。
３年ほど前に、このスチュワート島の９割ほどをラキウラ国立公園に制定されてから観光客も増加している。私達は５回ニュージーランドを訪問した中で４回も、この島を訪れニュージーランドの人達からも驚かれている。普通ニュージーランドを訪れると広大な牧草地に羊や牛がのんびりと草を食べている風景を想像するが、この島には牧草地はなく自然のままのブッシュが島を被っている。

今年は２月８日から２８日まで島に滞在する。ラキウラ・トラックをすべて歩くには１０日ほどの食料を持参せねばならない。一般的には３日のコースを歩いてラキウラを歩いたと称している。私達も３日のコースを２度歩いている。野鳥の多いコースで人にも出会わない。今回、滞在中に『Coast to Coast』というパンフレットを見つけた。読んで見るとスチュワート島の東海岸へセスナ機で飛び半島を横断してボートで帰ってくる。一日、十分に楽しませてくれそうだ。日本では考えられない。

朝、目が覚めると北の空に晴れ間がある。今日は光子は留守番。一人東海岸の Maison Bay に飛ぶ。ボート代も含めて１５５ドル。始めて島の飛行場に行く。管制塔も吹流しも何もない所。Maisonn Bay 行きのセスナ機は操縦席、副操縦席の後ろに４人しか席はない。インバーカーゴから既に２人の客が乗っていた。

３０歳くらいの夫人と４歳くらいの男の子が一荷物を持ってセスナに乗り込む。私は副操縦席に座らされる。７時５０分離陸。日の下は一面、樹海の世界。２０分ほどで Maison

Bay の砂浜に下りた。丁度、潮が引いた砂浜にヒコーキは見事に着陸。まるで不時着しているような気分になった。飛行時間は約２０分。子連れの夫人は来週の月曜日に迎えのヒコーキが来るまで、ここでのんびりと暮らすそうだ。子供用の自転車まで積んできていた。ダンナが浜辺に迎えに来ていた。

セスナが着いた浜辺から歩くこと３キロほどの地点に小さな沢があり、その沢をさかのぼって行ったら Masion Bay 小屋に出た。小屋の中では朝食をとっているグループ、出発の用意をしている人達で賑わっていた。小屋を出て約１時間ほど歩くと右手に小山（Island Hill）があった。道はこのあたりより悪くなり、ドロ道が続く。登山者はロングスパッツをドロ除けに使っている。私の登山靴はオークランドに置いてきたので、フランス製のメフィストをはいて歩いた。ほとんど平地に近い道で時々霧のような雨が降ってくる。あたりは一面、草千里というかブッシュの大平原、道はしっかりしているが、道標は何一つない。

Scott Burn という小さな沢が道の右手に出てくると雨で増水した沢の水が道にまで溢れ、道はまるで小さな小川となる。ヒザ下までの所の水は、まだ良いが時々股上まで濡れると冷たい。このような小川下りが延々と続く。DOC が作った木の桟道が水の中にかくれている。登山者の姿もなく道標も無かったので、果たしてこの道で良いのか、何度か地図とコンパスを出して方位を確かめる。このコースは運が良ければ昼間でもニュージーランドで絶滅の危機にあっているキウイに出合えるそうだ。今日は残念ながら道は増水し川となっていたので会うこともなかった。

座る場所も無いので立ったまま、光子の作ってくれたオニギリを食べる。沢を横切る橋は新しく作られていた。ここから目的地までが長く１時間半ほどもかかった。今朝、Maison Bay 小屋を出てからランチに１０分ほど立ち止まった以外は歩きづめであった。橋を渡ってからの道は小川からドロ道にと変った。その道をただひたすら歩き続けて「Freshwater 小屋５分」の看板を見てホットする。出迎えのボート地点には約束の２時に着いた。予約してあったボートには女性２人がザックを担いで到着したばかり。これから、あの小川の道を登りながら Maison Bay まで行くのは大変だろう。

ボートは快適なエンジン音をたてながらオバーンの町へ。心地よい疲労感と充足感にひたりながら宿へと向う。

追記

北島ワイカレモアナ湖の周りを５日かけて歩いた記録は下記の URL に掲載しています。

http://www.happy.net/ocuac/overses-record/2005NZ/2005nz.htm

八つガ岳の春

現役　和田　典之

5月4日（水）（快晴）

１６：３０（美濃戸口）→１７：１５～１７：２５（美濃戸）→１９：２５（赤岳鉱泉）

今回の五月山なんですが、いつもと違って気分的には落ち着いていたと思います。石鎚山の時と同じく見た目にはあまり雪がないように感じられました。ちょっと夜の歩行はやりにくかったんですが、まあ順調に赤岳鉱泉にたどり着けました。

5月5日（木）（快晴）

４：３０（起床）→５：４０（出発）→６：１０（行者小屋）→７：３０（赤岳）→９：３０（阿弥陀岳）→１１：１５（赤岳鉱泉）

この日は重い荷物を背負わずに登るということで気分的には楽でしたが、後の方になると運動不足かそれなりに足にこたえました。阿弥陀岳の山頂付近で少しアイゼンが必要かなという場所が出てきてアイゼンをつけることになったんですが、前回の石鎚山の時と同様にアイゼンが途中で外れてしまうことがありました。ネジの調節の仕方なども勉強したので今度はそのへんを練習しておかないといけませんね。１１時過ぎにはテント場に戻って来たということでその後ちょっと暇でしたがまあ順調でよかったです。

5月6日（金）（くもり→雨）

４：００（起床）→５：４０（出発）→７：３０（硫黄岳）→８：５５（根石岳）→９：３０（東天狗岳）→９：５５（西天狗岳）→１０：１５（東天狗岳）→１１：４０（黒百合平）

この日はいよいよ縦走です。この形式はあまり経験がないので大丈夫かという感じだったんですが、硫黄岳までは問題なく行けました。しかしその次の根石岳までの道のりはきつかったです。いったん硫黄岳の山頂から下って根石岳の山頂まで休憩なしだったので。しかしどうやら部長は東天狗岳まで休憩せずに行くつもりだったようです。やはり部長は元気だなとこの時は感じましたね。その後東天狗岳にたどり着いたんですが、ここで部長がこれから後天気が悪くなるなどの理由で予定を変更して黒百合平にテントを張ることを決断しました。そういうわけでこの日も行動を終えたのは１２時前になりました。なんだか情けない感じがするなと言っていたんですが、正直ちょっと疲れていた僕にとっては助かりました。夜は雨が激しく、雨水がポタポタとテントの中に落ちてそれが額に当たりほとんど眠れませんでした。早く朝にならないかなと感じた夜でした。

5月7日（土）（雨→晴）

６：００（起床）→８：２０（出発）→１０：４０（渋ノ湯）

この日の行動は２時間程度だということで、朝は朝食を食べた後しばらくぼんやりした後８時過ぎに出発するというのんびりしたものでした。ところがコース的にはこの日が一番辛かったです。なにせ沢地形で一応道はあるのですが、雨の影響か道がところどころ途切れていたのです。仕方がないので道ではない雪の上を歩くのですが、道ではないのでどこまでも足が深みへはまって行きます。他にも雪が崩れて水の中に思い切り足を踏み入れたりして靴の中がビショビショになりました。その後温泉に入った後駅前でバスの時間まで暇をつぶして大阪まで帰りました。総合的な感想としてはやはり体力不足ですね。ちょっと体力が落ちて来ているような感じがします。今度はもしこれより長い距離だったとしても対応できるようにしたいと思いました。

南九州の山旅と温泉一人旅

２００５／５／１０－５／２２

４０年卒　佐々木惣四郎

九州へは、高校の修学旅行できたが、北九州であり、今回の南九州は、始めてという事になる。今回の経路は九州の１００名山を中心とした山旅と温泉を巡るものでテントによる気ままな旅であった。順路として　①阿蘇　高岳（１５９２M）より黒川温泉　②九住山（１７８６M）より九重赤井温泉　③祖母山（１７５６M）④大崩山（おおあえ１６４４M）より祝子川温泉美人の湯　⑤霧島　韓国岳（からくに　１７００M）のえびの高原温泉　⑥霧島　高千穂岳（１５７４M）より霧島温泉　⑦開聞岳（かいもん　９２４M）の開聞温泉　⑧由布岳（１５８３M）の湯布院温泉と別府温泉　と８つの山と８箇所の温泉である。

ミヤマキリシマは、九重だけがほとんど咲いておらず阿蘇、霧島、由布は満開でジックリ鑑賞できた。ベストの山は、大崩山で、岩と渓谷と樹林の美しい山であるが、勇塚コースから坊主尾根は３０にものぼる梯子と多くのロープが設置されており特筆に価いする山であった。いわゆる上級コースという事になる。

頂上からの景色は、韓国岳が抜群で阿蘇は噴火の影響で火口は見れなかった。九重も良かったが小雨とガスでほとんど何も見えなかった。また麓からの景色は、やはり開聞が格好よく、知覧からの特攻隊員が真下に眺めながら散っていった事を思うと感無量の思いであった。由布岳も良く、高千穂と合わせミヤマキリシマが美しいところである。

テント場には気を使ったが霧島のえびの高原テント場には露天風呂がついておりビックリ、料金も無料で、祝子川温泉も何回も一回料金で入れ最高であった。逆に黒川温泉と湯布院温泉ではテント場に苦労した。開聞のテント場には沈殿もあり３泊もした。下記　概略であります。

５月１１日　阿蘇　高岳、中岳　　登り２時間

仙酔狭のケーブルは噴火で止まったままであったがミヤマキリシマの満開で多くの人がきていた。ルートは溶岩と小岩のミックスであったが比較的固まっておりよく止まる。中岳より向こうは監視所からマイクで引き返しが要求されてきた。

仙酔狭ではテント張れず黒川温泉に向かうがテント場なく小さな駐車場に已む無く張った。

黒川温泉に期待していたが余りに何もなく期待はずれであった。

５月 12 日　久住山　　登り１時間半

朝６時台は景色が見えていたが途中から小雨となりガスに覆われ何も見えなくなったので坊がズル、法華院温泉は諦め帰途につく。牧の戸峠からタクシーにて赤井温泉により、次の目的地の祖母山の麓である神原（こうばる）テント場に向かうがテント場まで２０分強の登りで参った。広いテント場で唯一人である。

５月１３日　祖母山　　登り３時間半

樹林の中をほとんど進むがヒバリを中心とした鳥が多く、鳴き声が絶えず聞こえ渓谷の美しさと青葉がみずみずしかった。丁度頂上にはフタバツツジが咲いていた。ルートは比較的良くて山が深いという感じがした。バス便が少なく明朝の出発とする。

５月１４日　大崩山（おおくえ山）の麓へ移動、渓流荘の山小屋に宿泊

延岡から祝子川（ほうり川）に沿って温泉につき山小屋に入る。￥５０００で朝には車で登山口まで送ってもらう事にする。約１時間の歩行短縮となる。

５月１５日　大崩山　　登り３時間半

勇塚コース（わくずか）から登るが花崗岩の大きな岩があり、景色も岩壁が向かいに見え、北アルプスの感じがする。梯子とロープが次々と現れ２回程道に迷った。帰りは坊主尾根であるが、ここも梯子とロープが恐ら

13

く２０以上ありビックリ。これがないと登れず下れずで念の為についているのではなく、整備に随分と労力が要したであろうと思われる。日本屈指のハイキングコースでいわゆる上級コースになるでしょう。
逆に頂上はまったく冴えなかったが。。。渓流は素晴らしく下流には発電所がある。ここでのテント場はバス停終点にある美人の湯の駐車場で便所、水道完備でしかも　１回入浴料で何回も入れ、
露天からは大崩山が正面に見えて最高であった。

５月１６日　霧島　韓国岳の麓　えびの高原に移動

延岡より都城を経て小林に入りバスにてえびの高原に行く。広い広い高原にて多くの観光客と車がいて賑やか。テント場は最奥ながら設備が整っており露天風呂があるのには驚かされ無料にも驚く。ミヤマキリシマが真っ盛りという感じ。また野生のシカが多くおり、変ったムードをかもしだしている。

５月１７日　韓国岳　　登り１時間強　、高千穂峰　　登り　２時間

ルートは良く朝一番乗りで頂上に着く。頂上よりの景色は抜群で朝早い為、新燃岳、高千穂峰が幻想的に浮かびあがっており、期待に反した良さでビックリ。本来なら縦走計画であったが食料が余りへらず、重いので縦走は取りやめ、車で高千穂河原に向かい空身で高千穂
に行く。上部ルートは溶岩砂で登り難い。火口付近にはミヤマキリシマが咲き乱れており、心なごむ。霧島神宮駅近くの露天風呂に入ったのち、開聞岳に向かう。
開聞駅近くよりタクシーにて池田湖までゆき開聞の景色を確認する。唐船狭流しソーメンに食べに行ったのであるが時間遅く全て閉まってしまっていた。ソーメン屋の人にテント場まで送ってもらう。１泊￥７００であった。

５月１９日　開聞岳　　登り２時間

１８日の雨沈殿のあと、朝は頂上にガスが多く出発を少し遅らした。頂上ではガスが時々晴れ、辛うじて景色が見え、種子島、屋久島等が望めた。ルートは７合目付近が岩が多く岩の上を伝う。ほぼ下山が終わる頃、下から知った顔の２人がきて最初解らなかったが西村君夫妻であった。全くの奇遇でしばし歓談する。元気にアチコチ飛び回っているようだ。
早く帰ったのでバスでフラワーパークに行くが日本一というだけあり、花の種類の多さと手入れの良さと規模にビックリ、感動ささされた。帰りは開聞温泉で露天風呂に入り、開聞の景色に見とれる。茶色の湯で国民宿舎であった。

５月２０日　知覧に寄り由布岳に移動

知覧には小学校の生徒が数多くきており、平和願う折ズルがたくさんあった。本を２冊買い別府に帰るまでに読み終えた。日本軍の貧弱さとうら若き青年の犠牲に胸詰まった。。
由布院ではテント場なく観光案内所で秘密にスポットを教えて貰いようやく張れた。予算がほぼなくなってしまい泊まる事かなわないのである。湯布院の温泉は、景色も良く良かった

５月２１日　　由布岳　　登り　２時間

ルートは良く快適でミヤマキリシマがたくさん咲いていた。さすがに登山客多く
この旅一番のハイカーであった。西登山口に降りてきたのだがこのルートは、すでに整備されておらず正面ルートだけが生きている。頂上は東峰はきつく西峰が楽である。

最後に経費であるが１０万円持参して移動費￥７４０００（タクシー￥２８０００）、その他
￥２６０００で残金￥５００のみという有様であった。一人旅は　気ままなるも寂しいところがあり、移動を利用したり、テントでの休みを利用して文庫本６冊を読み、かつ、カセットテープを散々楽しんだ。

14

黒部の衆（囚）

和田城志

黒部の衆は有名である。大野明代表以下、衆人１５名、癖のある面々である。重厚長大の正統派登山が廃れて久しい。中高年の活躍ばかりが目立つヒマラヤツアーと日本百名山が登山の主役になっているらしい。黒部の衆は布袋さんのような腹をした大野さんを筆頭にそういう山をやらない。身体外見はまごうかたなき中高年アル中だが、頭の中身は山岳部二回生で止まったままで、自分のことは棚に上げ、軟弱な登山を罵倒する。他人と比べて、少し登山実績を持っているという自負が、大言壮語を支えているに過ぎないのだが、けっこう人気がある。ちょっと始末の悪い、けれども貴重なご意見番的集団である。

その集団が本を出した。１８年前に出版した「黒部別山」の姉妹本というべき「黒部別山ー積雪期ー」である。黒部別山周辺の積雪期の登山記録を網羅した、まったくマニアックな山行記録集である。黒部別山がマイナーな山塊であることはもとより、積雪期の登山となると、対象者は限られる。８００部しか出回らないのでは、人目に触れることも少ないだろうが、早くもメディアは紹介してくれた。「岳人」６月号や朝日新聞富山版に大きく取り上げられた。

私はこの中で、「今何故、黒部別山積雪期なのか」という一文を書いた。私の登山への思いを集約した文である。登山史という体裁をとっているが、私の登山観を示すのが目的であった。黒部別山のマイナーさ加減が私の好みにフィットして、私の登山を象徴していると思う。興味のある方は、黒部別山で検索すれば、ホームページで本の入手方法が分かるので、ご一読下さい。（残部はまだあると思うよ）

先日、比良山岳センターで、「黒部に憑（疲）かれた人々」と題して、出版記念講演会を催した。６０名程のこじんまりとした講演会だったが、たいへん好評だった。社会人山岳会、大学山岳会、２０歳から８０歳まで、多種多様の人が集まってくれた。懇親会も明け方近くまで飲み語る人もいたらしく、山の集会とすれば、大成功だったといえるだろう。講演会は私がコーディネイトした。黒部別山にかかわった人々の生の声で、積雪期登山の歴史をたどろうというものだった。以下、内容を紹介しよう。

西川元夫（大阪大学山岳会）、５６年３月の鳴沢出合での黒部川横断のアタックメンバーで、当時の大阪大学山岳部の登山目標を赤裸々に語った。後立山東面のバリエーションルートから長期縦走そして黒部横断へと、登山方法の変遷を、上向き、横向き、下向きの山と形容した。マナスル第三次隊、黒四ダム建設調査と時を同じくした。半世紀も前の話は、参加者にとって驚きだった。

原田道雄（京都学士山岳会）、６０年３月の十字峡初横断のメンバーで、京大の目指してきたパイオニアワークについて語り、初横断の意義を主張した。横断そのものは工事関係の吊り橋があり、困難はなかったけれども、充実した山行であった。剣岳頂上での合唱は涙声で歌にならなかったとのこと。青春の感動が伝わるいい話だった。京大の黄金時代といえる頃の記念すべき記録である。

渡辺斉（武蔵之国山岳会）、６０年代の社会人山岳会の目指したもの、東京岳人倶楽部時代の世相やエピソードなどで、大いに笑いを取る。倶楽部の地域研究として積雪期黒部を　選んだ経緯や登山の大衆化など、登山ブームの真只中を駆け抜けた日本を代表するオールドクライマーの話は皆を魅了した。大タテガビン南東壁初登攀や２月の白竜峡横断の話など、貴重な話を聞いた。

石井孝行（チーム８４）、大滝凹状岩壁、トサカ尾根、大滝尾根の積雪期初登攀など、おびただしい記録の数々は参加者を圧倒した。大タテガビン南東壁単独登攀の下山ルートが十字峡から鹿島槍であったことや、後立山越えの剣岳登頂で帰路も再び後立山越えした話、単独で十字

峡横断をして流された話など石井孝行の独断場だった。

伊藤達夫（京都てつじん山の会）、現代を代表するロッククライマーであり、彼のオーソドックスな積雪期岩壁継続登攀は日本における最高難度の登山と言っていいだろう。今回の本の主な執筆者であり、編集作業でも中心的な役割を果たした。

服部文祥（サンナビキ同人）、岳人編集部に所属する山岳ジャーナリズムの旗手。これからの登山の行方を模索しつつ、いろいろなジャンルの登山を試みている。大滝尾根、中尾根主稜、八ツ峰北面などの記録を持つ。今年３月に、越中から信州に二泊三日でスキー横断をする。その中で、黒部別山、別山沢左俣の初滑降を成功させる。

梶山正（サンナビキ同人）、現在活躍中の山岳カメラマンで、私とともに入った雪黒部のスライドを紹介した。珍しいアングルの写真に驚きの声が上がった。特に剣沢大滝の冬の写真は貴重なものだ。

当初、講演をお願いした人に、宍戸元（大阪大学山岳会）、平井一正（AACK、神戸大学山岳会会長）、酒井國光（昭和山岳会、日本ヒマラヤ協会会長）らがいたが、日程が合わず、実現しなかった。冬の黒部を目指したこれら先駆者の話を、何とか後世に伝え残したいと、　夢は野放図に広がる。いつの日か、シンポジウム「黒部」を催したい。いくつかの分科会を設ける。キイーワードは山登りである。

１、明治以前の黒部の歴史（佐々成政の故事や黒部奥山廻り役の足跡）
２、日本山岳会黎明期の黒部登山（お雇い外国人から冠松次郎まで。山案内人のこと）
３、黒部電源開発（東洋アルミナムから日本電力そして関西電力へ）
４、黒部における雪崩の研究（志合谷、阿曽原のホウ雪崩と現代の雪崩研究最前線）
５、積雪期黒部の横断登山史（３８年の商大、関大の記録から現在まで）
６、沢登りの魅力（冠から志水哲也まで、剣沢大滝登山史）

かつて、冠たちは黒部時代という探検登山時代を築いた。我々は２１世紀の今、日本登山史の中に第二の黒部時代を築きたいと思う。数少ないが、着実に雪黒部のファンは増えている。黒部に憑かれたいろいろな人々と知り合い、酒を飲み、語り明かしたいものである。実現するだろうか。

翌日、比良山岳センターを辞し、住吉仙也（会友）、大西保（大阪山の会）、渡辺斉を我が家に招き、雑談を続けた。そこで、６１年のランタン・リルン遭難の出来事を聞いた。住吉さんはP-29登山隊の副隊長であり、西川さんは隊員だったとのこと。リルン遭難のニュースをBCで聞き、隊長の篠田軍治に市大の手伝いをせよと、二人が派遣された由。住吉さんはネパール３度目だったし、西川さんは隊一番の語学通であったというのが、人選の理由だったらしい。

カトマンズでのすべての渉外活動を終えた後、夜の市街路を高唱しながら歩いたこと、泉さんのスピーチ原稿は西川さんが書いたこと、発音が悪いのでホテルで練習した話、泉さんの天性の渉外能力や「お富さん」の歌はネパールの人にも受けたことなど、興味深く　聞かしてもらった。

パイオニアワークという言葉がてらいなく使えた、ヒマラヤ初登頂の古き良き時代の話は、この黒部にも当てはまり、この半世紀の登山の変遷がしみじみと思われた。原田さんや西川さんの黒部への憧れは、正しく現代に受け継がれている。私はその重要なメッセンジャーの役割を果たしたと自負している。服部文祥が東京での出版記念会でスピーチしたように、黒部の衆が一山岳同人の名前ではなく、普通名詞として使われるようになることを夢見る。黒部の衆人たちは、山登りにこだわる。肉体が衰えても、ハイカーにはなれない、何かにこだわる窮屈で融通のきかない極道なのだ。黒部の魅力に囚われた無期懲役の囚人でもあるのだから。

16

OCUACとインターネット

藤本　勇

２０００年９月に小林治俊さんの紹介で大阪市大の図書館（学術情報総合センター）を訪れました。館内を見物しますとパソコンが３００台ほどあり、そのパソコンに学生が張り付いてキーを打っている姿を見て、驚くと共に大学が情報技術に力を入れているのが分かりました。

最近の学生は就職活動もインターネットを利用して、自分の就職先を決定している。また、高校生も進学する大学の様子なども、事前にインターネットのホームページを検索して予備知識を得る時代に成っています。小学校の義務教育にも、パソコン学習が取り上げられて、それを教える先生がいないというのが報じられています。

市大の現役山岳部の部員がゼロに近づいて、山岳部の存在が無くなろうとしていました。

毎年、何とかせねばならないと口に出してはいますが、これと言った妙案がなくて首をうなだれているのが現状です。少子化と高齢化の日本には、山登りをするのは年寄りだけで若者は山を見限ったのかとも思われます。趣味の多様化する中でアウトドアを志向する若者もいるはずだし、何とか、そのような若者を山岳部に引き入れる手だては無いものだろうか?

インターネット社会に「大阪市立大学山岳会のホームページ」を作り上げました。このページが現役部員の獲得の一助にでもなれば最高と思いました。開設に際しましては藤村達夫さんの友人である塩見潤一郎さんのご指導とご支援を頂きました。現在、使っています表紙は塩見さんに作ってもらった物です。今も塩見さんの会社のサイト（www.happy.net）を無償で使わせて貰っています。当時は市大運動部のOB会でホームページを持っているクラブはまだ無かったように思います。

ホームページの初期の中身は「あいさつ」、「山岳会の歴史」、「現役山岳部への入部のすすめ」、「海外の山の記録」、「国内の山の記録」、「ヒュッテ雪線」、「掲示板」、「山岳関係の諸団体のリンク集」、「山岳蔵書目録」でした。

ソフトは兵頭君から譲り受けたホームページ・ビルダー２０００を使っていました。ワープロ感覚でページの編集をしてましたが、当時のページの閲覧ソフトは一部の人は Netscape というのを使われていて、私が編集したページの中の写真が見れないとの苦情もありました。それらの解決は東京の奥田尚志さんの指導によるものです。今はマイクロソフトの Internet Explorer が全盛になってます。ビル・ゲイツが億万長者になったのが理解できます。

ホームページを立ち上げた頃のインターネットとの接続は電話のアナログ回線を使い、ネットに接続していると一般電話が使えなく、女房に叱られ、「お宅は話中が多いね」と苦情を言われたものでした。当時 NTT の深夜なら何時間でも使える「テレホーダイ」という契約に入って、深夜にパソコンに向っていました。また通信速度も遅く掲載する写真も出来るだけ軽くするように心がけました。いまの高速 ADSL や光ファイバーなどは夢の夢物語でした。

山岳会ニュースとホームページの役割やどちらが先に情報を流すかを議論したのも懐かしいです。山岳会ニュースは遠隔地会員と山岳会との距離を縮める役割を持ち、一方ホームページは不特定多数の人に市大山岳会を知らしめることが出来るので両方とも重要だとの認識を持ちました。

三年前に「掲示板」を使って八木信男さんと大学に入学したばかりの木野英史君との往復書簡を拝読して、やっとホームページがお役に立つ日が来たと喜びました。これがホームページの最大の功績だったと自負しています。その春には大学当局から現役の部室の明渡しを宣告されていました。木野君や小椋君らが入部してくれて部室が存続し、山岳部復活の道を歩みまし

た。その後、木野君が山岳部に入部して現役のホームページを立ち上げたくれたのは皆様もご存知のことと思います。

２０００年の秋にホームページを開設以来、２００５年５月末までの閲覧者は２６５００人にも達しています。

次に当時は会員でメールアドレスを持っておられる方はまだ少なく４０名もおられませんでした。しかしインターネットの世界のスピードは物凄く、ホームページは天文学的に増え、会員相互のメール交換も急ピッチで伸びました。

一つのアドレスで会員全員にメールが届くものは無いかとネットで探していますと無料のメーリーングリストを発見し、そのリストに登録了解の方のみを対象にした連絡網が出来あがりました。いまでは一般用とは別に幹事会用のメーリングリストもあります。これらのメーリングリストは「ウイルスメール」から守るために一切の「添付ファイル」を禁止しております。ご不便をかけていますが何卒ご理解とご協力くださるようお願い致します。

最後に５年以上もインターネット関係のお世話をしていますとマンネリ化して来ています。７０歳の古希の年寄りがでしゃばるのもこの辺が潮時と思います。後は強力な後継者が見つかりました。兵頭　渉さんにお任せしようと決めました。

『皆様方からお褒めのお言葉を頂戴して恐縮しています』

S さんからは

HP の管理を兵頭さんに引き継がれたものと理解します。長い間お疲れ様でした。　山岳会の HP と Mail による連絡網は今や活動の大動脈としてなくてはならぬ物となりました。
作り・育て・維持された藤本さんに厚くお礼を申し上げます。

彼以外には考えられない兵頭さんという後継を得られてホッとされている事でしょう。　今後ともご指導のほどお願いします。

F さんからは

山岳会のホームページのお守りが藤本先輩から、兵頭君に引き継がれた事を今知りました、これまで大変な尽力をされた藤本先輩に大感謝、また、これから兵頭君、宜しくお願いします。

SO さんからは

こんにちは。ご無沙汰しています。長い間山岳会の HP を楽しませて頂いて、有難うございました。常に話題がほかほかで HP に力を注いで下さっていたのが画面からよく伝わってきました。
私も自分の HP をあんなに美しく色々なことがしたいなあといつも思わされています。
有難うございました

O さんからは

大阪市大山岳会 HP を創設され、これまで維持された藤本先輩に地球の裏側から拍手で喝采いたします。日本からの図書が、いまだに一月以上かかる僻地にいますと、HP の嬉しさが格別です。

KO さんからは

ＨＰの立ち上げから維持管理まで、長年ご苦労様でした。大変な労力が必要だっただろうと思います。有難う御座いました。まだまだ隠居はせずに、ＯＣＵＡＣを引っ張って下さい。

KU さんからは

ホームページの管理から引退ですか。突然でびっくりしました。長い間お世話になり、感謝申し上げます。でも老後（？）の楽しみがなくなってしまうのでは？

18

平成１７年度山岳会総会が開催されました！２００５／４／２３

本年４月２３日桜散る真っ只中弥生会館にて恒例の総会が３４名の出席者の下開催されました。本年からこれまでの池永会長に替わり川勝新会長及び佐藤新幹事長の下にやっと大阪に腰をすえる事になった伴さん、義本さんの新顔を加え本年の新しい出発を迎える事になります。念願の本年の新人はまだ応募者がなく厳しい出発になりそうです。

大阪市大山岳会 2004 年度総括

山岳会幹事長佐藤一良

佐藤です。今日は。

我が山岳会の 2004 年度の総括という事で少し時間をいただきます。

本日は現役４名を含め３４名の会員の方々に参加いただいております。ありがとうございます。

先ほど川勝会長が触れられていましたが、山岳会の高齢化と少子化が進んできています。特にここ 20 年の新入会員は９名にすぎません。これは 40 歳までの会員が殆どいないと言う事です。幸い 2003 年・2004 年と８名の現役部員を迎えて廃部という危機的状況はひとまず回避されましたが、当分は 50 歳以上の会員の皆さんが山岳会活動の中心になるという事です。

山と自然を楽しむ方法も会員の高齢化に伴い変ってきました。激しい岩登りは岩稜や縦走と沢歩きに、冬山・春山はスキーに、5 月は陽光を浴びて残雪のなかで仲間と遊ぶことが多くなりました。

山本先輩の東北の山歩き、藤本さんのニュージーランド、廣谷・奥田両氏のミニアコンガ、佐々木さんのネパール、参加者が延べ 40 名を超え毎年メンバーが増え続けている小笹スキースクール、上田さんの北海道仕込の山スキーなど後ほど報告をして頂きたいと思います。

高齢化をものともせず多くの会員の方々が夫々の方法で同好の士をつのり自然の中で活躍されている事は誠に心強いかぎりです。

またリフォームされた雪線が私共にとってますます大切なものとなってきています。登山やスキーの中継点として、又気の合った友人達と山小屋ライフそのものを楽しむために多くの会員諸氏に活用されており私共の活動のセンターとしての役割をはたしています。雪線を快適な環境で維持していただいている運営幹事の久保田さん、中嶋さん、兵頭くんに感謝申し上げます。

現役の諸君がどのような活動をしてきたのか、山岳部の生活をどのように考えているのか小椋主将から報告があると思いますが、60 歳を超える指導幹事と 20 歳代の若者達との交流がうまく成立するのかといった点も聞かせてもらえればと思います。

最後に会員の皆さまのますますのご活躍を期待しますとともに、もっと沢山の会員の方々に山岳会の行事・活動に参加していただけるようお願いもうしあげます。以上。

平成１６年度行事活動報告

山田裕敏

1) 4月30日～5月4日

現役新人合宿 attend 於岳沢

佐々木、山田、兵頭、佐藤、島川、　5名

2) 6月5日　**第113回ﾎﾞｰﾄ祭**

藤本、小笹、上堂、岡本、佐々木、島川、佐藤、大島、

兵頭、苑樹、八木、吉村、現役5人　17名

3)6月26日　岩ﾄﾚ 不動 佐々木、山田現役3名　5名

7月 3日　岩ﾄﾚ 蓬莱峡 佐々木、ｺｰﾁ杉山氏現役3名　5名

4)7月　**比良山口の深谷から蛇谷ヶ峰現役との合同登山**

佐々木、山田、佐藤、苑樹現役4名　8名

5)8月8日～15日　**現役夏山合宿** attend 於剣真砂沢

上堂、佐々木、山田、上田　4名

6)9月18日～19日　**比良山集中登山**貫井谷右俣、正面谷ほか(伴さん歓迎登山)

藤本、小笹、伴、苑樹、大堀、山田、佐藤　7名

7)9月22日～25日　太郎小屋―黒部五郎岳―双六小屋　鷲田夫妻他　2名

8)10月23日　比良山貫井谷左俣　伴、山田　2名

9)10月2日～10日　ﾈﾊﾟｰﾙ・ﾋﾏﾗﾔ・ﾁｭﾙﾌｧｰｲｰｽﾄ峰(6059m)　佐々木　1名

10)11月6日、7日　北沢峠～仙丈岳往復(雪線7周年記念 Golf 後の山行)

佐々木、上田　2名

11)12月19日　京都清滝川支流毘沙門谷　伴、山田　2名

20

12) 12 月～4 月　　ｽｷｰ合宿

12 月	北海道	(小笹、藤村、佐藤、大島、藤木、島川、兵頭、苑樹、井本、吉村)	10 名
1 月	栂池	(上堂、佐藤、大島、兵頭、苑樹、大堀)	6 名
2 月	大山	(上堂、山辻、伴、上田、佐藤、島川、山田、澤田)	8 名
2 月	栂池	(小笹、上堂、久保田、鷲田、上田、藤村、藤木、佐藤、大島 大堀、苑樹、井本, 渡邊、兵頭)	14 名
3 月	栂池	(上堂、伴、佐々木、兵頭、大堀、苑樹、吉村親子)	7 名
4 月	栂池	(小笹、上堂、大堀、佐藤、苑樹、吉村親子)	7 名

13) 3 月 7 日、8 日　大山登山、ｽｷｰ　　佐々木、(山田ｽｷｰのみ)　　2 名

14) 3 月 15 日～23 日 ﾐﾆﾔｺﾝｶﾞ

廣谷、橋本、北濃、奥田寛 4 名延参加者　　合計　118 名

平成１７年度活動予定

4 月 29 日～5 月 5 日	現役 5 月山行との合同登山責任者佐々木・山田
5 月 28/29 日	ボート祭“大島
6 月 11/12 日	大台大杉谷遡行“山田
6 月 18/19 日	新人歓迎登山（空木岳）“澤井
7 月 21/23 日	ｱﾗﾗｷﾞ会ｺﾞﾙﾌ及び駒ヶ根山荘掃除会“久保田
8 月中旬	現役夏山合宿に部分参加“佐々木・山田他
9 月 10/11 日	中央ｱﾙﾌﾟｽ与田切川遡行“伴
10 月 8/10 日	紅葉の剣早月尾根から本峰往復“大島
11 月 3～6 日	雪線ｺﾞﾙﾌ大会その後北沢峠/仙丈岳/伊那谷“久保田・山田
11 月 26 日	京都北山散策“山田
12 月下旬～4 月	初旬各種スキー行“大島・山田他
3 月初旬	バード・ウオッチング“上堂・島川

編集後記

せっかく、原稿を書いて頂いたのですが、編集者兼印刷者が多忙のため発行、発送が大変遅れましたことをお詫びもうしあげます。

現在、五十代を目前にして山岳部の顧問をクビ？になり、高校生と龍笛を奏でる雅楽部の担当となっております。

雅楽といえば東儀秀樹さんが有名ですが、彼曰く、シルクロードの音楽が日本に入ってきて整理整頓されて雅楽として日本に根づいたのだそうです。崑崙八仙という舞の曲もあり、崑崙山に住む仙人の話に基づいた舞だそうです。

「打ち合わせ」「やたらに」「呂律」「二の舞」「千秋楽」などなど日本語の語源にも雅楽がかかわっていることも知りました。

同時に、夢枕漠さんの「陰陽師」では、安部晴明の相棒となっている龍笛の名手、源博雅の存在も知ることとなり全巻読破をめざし、さらには今昔物語も読破しようかと思っています。

とはいえ、目下の目標は、龍笛のレパートリーを増やし、崑崙に行くのは無理なので穂高の頂上の祠に雅楽を奏上してお参りをする方のＢＧＭを奏でようと考えております。　　（N）